

都議会民主党 東京都議会海外調査報告（概要）

平成 22 年 1 月 31 日から 2 月 9 日まで、都議会民主党は、馬場裕子、大津浩子、大西さとる、岡田眞理子、興津秀憲の 5 名で海外調査を実施した。訪問先は、ロンドン、ヘルシンキ、コペンハーゲンで、教育を中心に、交通、消費者施策など充実した調査・視察を行うことができた。団員 5 名が同じ研修や経験をすることによって、5 倍の知識と感性を養うことができた、深く感謝している。

フィンランドでは、教員養成大学として有名なユヴァスキュラ大学、付属小・中・高校そして一般の総合学校、教育研究所などを訪問し、PISA における優れた結果の理由を検証した。その 1 つは教員養成の充実である。教員は大学修士課程修了が条件であり、中でも大学 1 年から始める教育実習に多くの時間が掛けられていた。2 つめは子ども一人ひとりのニーズに対応した教育である。支援を必要とする子どもにはサポートする大人が必ずつくといった人的支援が確立されている。3 つめは子どもの学習の躓きに即対応していることである。解らない、出来ない子どもには学習が定着するまで教えることが当然として行われており、インクルーシヴ教育が実践されていると確信させられた。どの学校も、授業中の私語が無く子どもたちが集中している様子から、この国の教育レベルの高さを認識することができた。

デンマークの教育の特徴は、「平等」と「公正」の理念に基づいていることである。教会立の私立校や公立幼稚園・小学校と託児所、障がい児施設を視察してきたが、障がいの有無にかかわらず、どの子どもも平等に学習する権利があることが根付いている。「自分の進む道は自分が決める」という自分の能力に合った教育や職業を選ぶ観点をもって成長し、進学率は普通高校と職業学校の割合が 50 : 50 となっている。職業教育の高さはフィンランドでもデンマークでも同様ですが、他にも両国に共通していたことでは、9 年間の一貫教育カリキュラムと 6 歳の子ども達への就学前教育、プリスクールの充実である。わが国も縦割りの教育行政から個の発達を連携して支える仕組みへの変革が急がれる。

イギリスでは公立学校と歴史と伝統を誇る私立全寮制男子校を視察した。両校に共通していた点は、世界に目に向けた積極的で特徴ある教育観を持ち、イギリスならではの感じた。今後都立高校との留学生交換など学校間交流が進むよう支援していきたい。

次に、ロンドン、及びコペンハーゲンで、交通政策の調査を実施した。以前は、双方とも中世の街並みのため、道路拡張が望めない状況で、市内中心部の交通渋滞の解消が大きな課題であった。そこで、ロンドンは渋滞課金制度を導入し、バス路線の充実などにより市内中心部に自家用車の流入規制を実施した。一方、コペンハーゲンでは自転車

専用道路の整備など、自動車から自転車に乗り換えることを市民が選択するような施策を採用した。さらに、新しくメトロを建設するといった、公共交通の充実政策を同時に実施したこと、粘り強く市民への協力を訴えたことなどが成功の秘訣であると感じた。

視察中は30年ぶりの積雪とのことだったが、車道よりも自転車道を先に整備するという方針のおかげで、皆何事もない様子で自転車をこいでいた。

大都会東京の交通政策、自動車利用からの脱却を進める、大胆かつきめ細やかな施策が必要であると痛感した。

最後の消費者行政については、13世紀から消費者行政の歴史を有する英国の技能省(BIS)、リッチモンド区等を訪問した。

技能省は、「不正取引からの消費者保護」を基本原則として、「年末から2年間新パイロット事業を開始する」とのことである。これは消費者権利に基づき、行政機関が消費者と企業の間に入り「自発的賠償金」を促し、法廷を通さずに和解に導く実験事業である。

ヨーロッパ思想には、消費生活ではすべてに「公正・安全」性が、教育では平等に同レベル教育を受けられる「公平」性が、根底に流れていることがよくわかった。

朝9時になってもまだ薄暗い、そんな北欧の国々の中で、早朝6時15分から始まる保育園や、夕食は必ずと言ってもいいほど家族で一緒にする、読み聞かせをする父親、社会全体で子育てをしている姿、生活スタイルそのものの選択に、国民相互の安全、安心への支えあいと信頼感を強く感じる事ができた。

訪問先全ての方々が私たちの訪問を真摯に受け止め、熱心に答えようとしてくれたことに深く感謝し、「学ぶことが世界を広げる」教育に参画していくことを心に誓いながら帰路についた。

今回の視察を通して、様々な方から賜ったご好意に、この場をお借りして、心より御礼を申し上げたい。

団長 馬場 裕子